

## コロナ禍における学校教育の在り方取りまとめについて

令和2年2月頃より感染拡大してきました新型コロナウイルス感染症の影響により、教育現場においては、学校の休業、行事の中止や変更、GIGAスクール構想の前倒しによる一人1台のタブレット端末の配布、施設の感染予防対策など様々な対応をしてきました。そのようなコロナ禍の状況下で学校を取り巻く環境の変化、コロナ禍の先行きが見えない状況、教育のニューノーマルへの適応など、コロナ禍における学校教育の在り方について、令和3年度第1回目の総合教育会議のテーマとして協議を行いました。様々な意見が出ましたので下記のとおりまとめましたので報告します。

### 記

#### 1 協議における委員からの意見

協議における委員の皆さんからの意見は以下のとおりでした。

##### (1) コミュニティ・スクールのスピード感を持った実現

新型コロナウイルス感染症のまん延により、これまで当然となっていた環境に大きな変化が起きました。子どもたちにとって学校生活における対面授業、部活動、各種行事など当然と思っていた場所や時間など、もたらしてくれていた豊かなものがすべて消えてしまいました。学校休業の長期化が明らかになっていくと、慌ててオンラインによる学習支援の必要性が言われたりしました。

このコロナ禍によりGIGAスクール構想が前倒しされ、1人1台のタブレット端末が支給され、子どもたちの学び方が大きな転換期を迎えたと言えます。

これからの子どもたちが厳しい社会を生きてくためには、地域と学校をどのようにつなげていくのか、学校の負担を増やさずにGIGAスクール構想を加速させていくのか、学校と地域が連携した運営の在り方、いわゆるコミュニティ・スクールの議論をスピード感を持って進めていくことが、コロナ禍の中で浮き彫りになったと感じます。

学びを止めない大礫の教育というものを考えていく必要があるのではないかと考えています。

##### (2) コロナ禍における若者の抛り所

一昨年に武漢でよくわからないウイルスがあつて大変なことになっている話があり、気が付くと1年半が経過し、ウイルスによる影響がいつまで続くのかわからない状況となっており、人と会うことがこんなに厳しいことになるとは夢にも思っていませんでした。そしてもうひとつ2002年頃にニートと呼ばれていた人々がおおり、引きこもりなどと呼ばれ、今は20代から60代の前半までニートと呼ばれる方が増えています。

コロナ禍になり、若者たちがどう生きていくのか、学校教育も大事だが、そのような者たちがどこに抛り所を見ていくのか、みんなが考えていかななくてはいけないことです。

引きこもりになった人が年を取り、両親もいずれ退職し年金暮らしとなります。大礫町の中にもそのような状況があるのではないかと思います。引きこもりが時代に合うということではなく、なんとか解決しなくてはならないという悩みを持っています。コロナ禍で大変な問題が起きていることから、どうコロナ禍と向き合っていくらよいかを十分に考えていかななくてはならないところに来ていると思います。

### (3) オンライン授業のやり方と子どもたちの精神的ケア

この先、また休校等が絶対に起きないとは言えない中で、両親がリモートワークの家庭も多くなっていると思いますが、職種によってはリモートワークができない家庭もあると思います。両親がリモートワークで、同じ家庭で子どもがオンライン授業しなければならない状況になり、普段の生活との違いからイライラが募り虐待や暴力につながる懸念されます。例えば、両親が仕事で子どもが家で1人になることもあり得ます。そのような状況の場合、学校に来させるのかオンライン授業にするかなどの関係等、昨年以降休校になっていないので現実にもそのようになったときのシミュレーションをしたら良いのではないのでしょうか。オンライン授業について定期的に、例えば月に1回、週に1回とかあってもいいと思います。インターネットの接続状況の課題も常に確認したほうが良いのではないかと考えています。

またコロナによって、運動会が半日開催、入学式や卒業式の来賓の出席なしなど、コロナ禍により簡素化されました。この辺りについてもコロナ禍を機に見直してもいいと思います。

コロナ禍でのオンライン授業など学びを止めないことは大事ですが、やはり対面という部分は外せないものであり、友達に会える、会えないというのは子どもにとってとても大きく、対面が叶わず、画面上だけになったときの精神的ケアについてしっかりフォローを考えていく必要があると感じています。

### (4) タブレット端末を使った大磯ならではの学び方

長期化を見据えたコロナ禍のなかで、これからどうしたら良いかというのがテーマだと思います。

「教育環境をすばらしくすれば人が集まってくるんだ」ということにつながれば嬉しく思います。それは観光で人を呼ぶのも一つではありますが、教育で人を呼べるようなまちづくりをしてほしいと思います。

GIGAスクール構想の前倒しにより一人1台のタブレット端末を配布されましたが、大事だからと傷つけないように箱に入れとくのではなく、文房具のように毎日使ってもらいたいと思っています。大人は「壊したらどうしよう」など様々な心配をしますが、すべてひっくるめて家に持って帰って十分使ってほしいと考えています。「自主的に学ぶ」、「自ら道具を活用して自らの学びを自ら作っていく」という方向をもっともっとやっていく、これが大磯のやり方だと思います。

## 2 その他

- コロナ禍でオンライン授業やリモートワークなど様々な形が導入されてきましたが、基本的には対面が基に思います。
- ニューノーマルな教育への対応としては、ICT支援員を配置する、プレゼンテーションする場所を設定するなど、ニューノーマルに対応するための予算の確保が必要であり、そのようなところにお金を使ってもらいたいと考えています。
- ICT教育に関心を持っている親は多く、町の魅力度を測る項目にもなっていることがあります。
- コロナ禍だからこそ、新しい発想の転換をしていくことを受け止め、それがやっていけるかについて議論していかなくてはならない問題だと思います。